

令和4年度（第2回） 身近な教育委員会 実施概要

区民が身近に感じる教育委員会の実現に向けて、「身近な教育委員会」を下記のとおり実施しました。

記

日時 令和4年11月2日（水） 10時30分～12時30分

場所 上板橋第二中学校 体育館

概要

第一部 第21回教育委員会

報告事項「区立学校における働き方改革について」

第二部 保護者懇談会

○グループ討議

『学校・教員の仕事の範囲について』

内容要旨は次ページ以降のとおりです。

参加者 45名（うち第一部のみ参加者9名）

内訳 保護者等 29名

教育長・教育委員 5名

中川修一教育長 高野佐紀子教育長職務代理者

青木義男委員 長沼豊委員 野田義博委員

教育委員会事務局関係者 11名



グループ討議

各班の発表内容（要旨） ※時間に限りがあるため、3つの班に発表していただきました。

<A班>

- 先生方の負担とは一体何だろうという話のなかで、一般的な事務というところが、普段知られていない先生方の苦勞の一面だということは大変よく分かった。
- 保護者の目線から、保護者のあり方などを見直す1つのいいきっかけになった。
- 諸外国のいいところはもちろんあるが、日本の教育の質のよさもあり、いかに残しながら先生方の負担を軽減できるかというところが今後の課題になる。
- 朝登校時に先生が門の前に立って挨拶する。あの光景は子どもたちにとってすごく嬉しいものだと親として認識している。しかし、先生方の中には負担を感じている方もおり、早く子どもたちに会うことができ嬉しい方もいる。
- 上手く調整し合いながら、保護者も地域も、ともに育てる教育を実現できればと思う。

<C班>

- 諸外国に比べて労務内容が少し多いが、日本は日本、諸外国は諸外国というところもある。
- 担任1人で35人を抱えるのはとても大変なことだと思う。第2、第3の人材をしっかりと入れていくところに力を費やさなくてはいけないのではないかな。
- あいキッズの職員を学校の時間帯にサポートスタッフとして入れると、学校ともよりつながりをもてる。色々な立場の方、色々な目線から子ども一人一人に向き合っていけるのではないかな。
- 人材を確保するには予算がかかると思うが、何とか入れていただけたらと思う。

<E班>

- MIM（多層指導モデル）の研修をなくし、代わりに専門の方をつける授業をしながらサポートすることで研修の時間を他の業務にあてられるのではないかな。
- 一部の学校では既に取り組んでいるが、保護者が授業のサポートに入るのはどうか。
- 国で定められているというが、やはり1学級の人数を減らすことが児童生徒への目が行き届くことにつながる。
- 新任の教員には再任用の方が副担任でつきサポートするのも1つの案
- 教職調整額を改善するべき一方で、無駄な作業がないかを管理職が見極める必要もある。
- 学校も対応する時間を決められれば良い。営業時間という視点では保護者も自身の仕事で経験している問題だと思うので、双方が問題意識として捉えていく必要がある。
- 3学期制だが通知表は前期後期で出している学校もいくつかある。
- 通知表の所見は面談の際に伝えて記載省略してもいいのではないかな。

各班で出たご意見（抜粋）

<B班>

- 教員がやらなくてもよいと思うもの
 - ・給食時の指導→教員は昼休憩をとり、代わりの人材が見守る
 - ・登校指導→基本的には諸外国同様保護者の責任とする、システムを活用、登校班の活用
- 学校でないとできないこと
 - ・学校行事等の集団でないとできないこと
 - ・人間関係の構築や人格形成等に関わること
 - ・みんなで学ぶ学習
- iCSをもっと活用できるとよいが、そもそもiCSが何をすところなのかの理解が不十分。傍聴を呼びかけるなど、もっと周知等が必要。
- 学校には、もっと助けを求めてほしい。何をしたらよいのかなどが分かれば協力できることもある。

<D班>

- 働き方改革を考える上で、何が大切で何が問題なのかを考える必要がある。
- 不登校支援では、区で一括してリモートで授業を行う環境を作れないか。
- 仕事をスクラップ&ビルドで考えていかないと、教員の仕事は増える一方。
- 現場でスクラップ&ビルドすることもあろうが、区（教育委員会）レベルで対応すべきことが多いのではないか。区から国や都に要望を行うことも必要。
- 学校における個々の指導では、保護者の期待が大きくなりがちであり、保護者対応が難しさを帯びるもの、こうしたことの関連であるように思う。
- 親として子どもに関わるとき、先生がクッションになってくれることもあり、先生と保護者は一緒に考えていくものであると思う。
- 教員不足について、教員が孤立しないような、学校で一体感ある風土の醸成が大切。
- 教員にとっての「やりがい」を高めていくということも大切。教員として働く魅力を高めることで、教員の確保にもつながるのではないか。
- 部活動の地域移行について、部活動は先生が面倒を見るものだと考えていた。また、生徒が自主的に取り組むということも考えてはいなかった。
- 地域に専門的な技術を持った人材がいれば、そうした方々に教えてもらおうということは、子どもたちにとって貴重な経験だと思う。

<F班>

- 諸外国との比較は興味深かった。一方で、労働時間については民間とそれほど違うわけでもない。
- 地域の人が学校に入って手伝う状況にはあるものの、先生もなかなか仕事を任せるということに踏み切れない印象がある。
- 学校ごとに取り組みが違って良いということは初めて聞いた。
- 募集しても応募がなく、人材を投入することが難しい。やることとやれないことを分けていく必要がある。

- 学校の先生は今も夢の職業の一つでもあると感じる。希望している人はいるのに、やりたいけどやらないというのが実態で、応募倍率は2倍を切ってしまうと聞いて驚いた。部活動の指導とかもやりたい人はいると思っていた。
- 採用の流れが悪いということもある。先に民間企業が決まっているので、学校の先生を選ぶ人も減るのではないか。民間に流れてしまっている可能性がある。
- 部活動の話で言えば、「やらなくていい仕事」と考えるのはかなり初めての試み。今まで先生は自分の子どもの行事にも行けないということもあった。
- 学校から部活動を切り離すという地域移行という考え方を通して、これまでの常識を変える必要がある。これによって時間が作れるようになる。
- クラブ活動は保護者でもできる。その先にある部活動も範疇にはならないか。
- 棚卸の時期に来ていると思う。例えば、「通知表を作成しない」ということもありうる。「運動会をしない」ということもありうる。(指導要録については必須ではあるので、評価は必要)
- コロナの影響で運動会の業務はだいぶ軽減された。これをまた揺り戻しになるのか、新たな形として作り上げるのか議論していくべき。
- 諸外国の考え方例えば、登下校の見守り、掃除、テストの丸付け、食事時間の対応は地域の方や外部に出すことができるのではないか。これについて地域がどこまで入っていくか、見えるようにしなくてはいけない。
- 良い学校の例を公開し、展開する必要がある。水曜授業の午後カットは素晴らしい。オンライン配信で区内全校が同じ授業を受けるようにすれば、その時間は空くはず。GIGAスクールやオンラインは大きなきっかけになると考えている。

<G班>

- 教員の現状を知らない。もっと広く知ってもらふ必要がある。家庭の中で解決すべき事案であっても学校に頼っている事例を見かける。教員の状況を知ることでそのような事案は減っていくのではないだろうか。
- 教員負担軽減のため、PTAのアンケートをGoogle Formに変更した。変更前の紙ベースの際は、提出していない家庭に児童を通じて催促し、提出されたペーパーを児童の順に並べ替えてクリップに留めて提出してくれていた。教員はとても丁寧に対応する一方、負担が強いだらうと感じていた。Formへの変更後は楽になったと言ってもらっている。
- 学校の外で発生したトラブルは学校が関わる必要が無いと思う一方、実際に万引きや非行案件で学校に連絡が来た場合は学校と保護者で対応している。学校外でのことは学校は関わらない、という点について保護者や地域との合意形成が必要であると感じる。iCSを含めて意識改革が必要である。
- 知・徳・体を一体的に学ぶ日本型学校教育が評価されていると言っているが限界が来ているのではないか。学校が“まるがかえ”する状況から“一緒にやる”状況に変えていかないといけない。
- かつては学校を舞台にしたドラマが多く作られていた。社会が学校に対して夢や未来が描けなくなってきたのかもしれない。
- 児童・生徒や保護者が相談できる窓口が学校以外にあると良い。

教育長所感（要旨）

【初めに】

本日は素晴らしいご討議をいただき、大事なアイデアもいただいたこと感謝しています。

私は2015年の7月から、学校現場からこの職に就きまして、「教育の板橋」を掲げて早や7年目が過ぎました。この7年間に、学校には驚くほどやらねばならないことが増えております。

【学校現場の危機的な状況】

そんな学校を例えると、4トントラックに8トンの荷物を積んで走っているように感じています。しかも、毎日の走行時間、走行距離も長い。いつ事故が起きてもおかしくない状態です。

さらに、届け先からは、もっと早く届けろ、箱が傷んでいるぞ、等々、厳しい注文の声がつけられ、先生方が精神的にも追い込まれ病気休職に入っている状況にもなっています。先生方はオーバーワークで疲労感いっぱいになりながらも、目をこすり、頭を振りながらハンドルを握る運転手のように思えてなりません。

そのため、実は、令和5年度採用の東京都の教員採用試験は小学校が1.4倍、中学校高校が2.9倍。

数年前は8倍、9倍は当たり前だったのですが、こんな危機的な状況に入っております。先生の成り手がいなくなってきているという日本の教育の状況です。

【先生方のやりがい】

しかし、そんな先生方が、目を輝かせる場面、やりがいを感じる場面があります。それは、子どもたちの学習指導、あるいは、生活指導のよりよい方法を研究する時間や、その研究の成果を実際に子どもたちに発揮している場面です。

学校の役割は何か。私は、2つ考えます。1つは、子どもたちの安心・安全な居場所づくり。もう1つは、子どもたちの確かな学力を定着・向上させるための学び舎づくり。

この2つは、まさに先生方が目を輝かせる使命であり、結果として、子どもたちに質の高い教育を提供できることにつながり、保護者の皆様、地域、区民の皆様にもご満足いただけることにほかなりません。

だからこそ、勤務時間内に、先生方にこの2つの仕事に携わる時間をできるだけ多く取っていただきたい。そういった環境を作り出すことが、私ども教育委員会の喫緊の課題、使命であり、校長先生を初め、先生方の知恵の見せどころであり、保護者、地域の皆様のご理解、ご協力の総和ではないかと思っています。

教育委員会と学校、保護者、地域のトライアングルが協働してこそ、この実現が可能となります。



【キーワードは“当事者意識”】

そのためのキーワードは「当事者意識」と、私は考えています。すなわち、学校に関わる全ての人が、主語を、一人称、「私は」「私が」にしていくことではないかと思っています。

まず、子どもは学校があるから行くのではなくて、子ども自身が、自分が安心できる居場所としての学校を作る。保護者の皆様方には、自分の子どもが学ぶ学校を先生方と一緒に作り上げていくという意識を持っていただく。地域の方々には、地域の宝である子どもが学ぶ学校にできる限りの支援をしていこうという気持ちを持っていただくこと。

もちろん、学校は、先生方は、学校に通う全ての子どもが差別や排除されないで学び合う学校を作り、質の高い授業を提供すること。

こうした「当事者意識」を持って、関係者が知恵と勇気を持ってありとあらゆる手段を試みていくことが板橋の子どもたちが学校に行きたい、学校で学ぶのが楽しい、明日も学校に行きたいと感じてもらう。

保護者の皆様に、我が子を板橋の学校に通わせてよかったと思っていただける。

地域の方々が、〇〇学校は我がまちの誇れる学校だと胸を張っていただける。

先生方が、板橋の学校で勤務を続けたい、指導をする力が高まったと実感できる。

それぞれが真にそう思える「教育の板橋」の実現に結び付くと信じて疑いません。

【結びに】

先生方の働き方改革の肝は、子どもたちの安心・安全な居場所づくりと、確かな学力の定着・向上の学び舎づくりの2点に費やす時間をどのくらい多く確保できるか、それ以外の業務をどれだけ削減したり、他の方で代替したりできるかにあると思います。

そのために、教育委員会としては、教職員の定数改善を、先ほどの発表にもありましたように、国や東京都に要望するとともに、教員以外に必要とする人材措置などの条件整備に努めてまいります。

学校は、昭和の時代から当たり前に行われている教育活動を見直し、やることよりも、やらないことを決める決断力をもって、教育課程を見直し、保護者や地域の方々には当事者意識を持っていただくために、PTA活動の改善や、全小中学校でスタートしたコミュニティ・スクールを起爆剤に、子どもを幸せにする学校をつくるよう、共に進めていただければと願います。

本日は、ご多用の中、多くの保護者の皆様にお集まりいただき、有意義な討論ができましたことに心より感謝申し上げますとともに、改めて、今日を「教育の板橋」のリスタートとして私自身が肝に銘じ、教育行政に誠心誠意、努めてまいることをお誓いし、終わりの言葉といたします。ありがとうございました。